

「自分の考えを持ち、それを表現する力」
の向上に向けて
～小・中学校の授業改革への提案～

平成21年8月(改訂版)

岡山県教育委員会

目 次

1 授業改革の提案	1
2 授業改革推進事例	
(1) 国語 授業改革の視点	3
改善の具体例①	4
改善の具体例②	5
改善の具体例③	6
改善の具体例④	7
(2) 算数・数学 授業改革の視点	8
改善の具体例①	9
改善の具体例②	10
改善の具体例③	11
改善の具体例④	12
(3) 社会 授業改革の視点(追加)	13
改善の具体例①	14
改善の具体例②	15
(4) 理科 授業改革の視点(追加)	16
改善の具体例①	17
改善の具体例②	18
(5) 外国語 授業改革の視点(追加)	19
改善の具体例①	20
改善の具体例②	21
改善の具体例③	22
(6) 就学前教育(追加)	23
3 授業改革を進めるために Q & A	
(1) 校内研究の充実	25
(2) ICTの活用	27
(3) 「学び合う」授業づくり	28
(4) 学習到達度確認テストの活用	31

1 授業改革の提案

21世紀は、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われています。このような社会において主体的に生きていくためには、「自らの考えを論理的に表現する力」や「情報を正確に理解し、発信する力」が求められています。また、グローバル化や情報化の進展により、コミュニケーション能力を育成する必要性も一層高まっています。

しかし、本県の子どもたちの課題として、「根拠を明らかにして、自分の考えを説明する力」や「必要な情報を整理して、筋道を立てて考える力」の育成が十分実現されていないことが、全国学力・学習状況調査の結果から明らかとなりました。

こうした社会の要請を踏まえ、本県の課題を克服するために、重点的に取り組む授業改革の視点として、「**自分の考えを持ち、それを表現する力**」の向上を提案します。

「自分の考えを持ち、それを表現する力」の向上

次に、授業改革の視点を具体的に示すとともに、授業改革を進めるためのQ&Aを盛り込んでいますので、活用ください。また、「**自分の考えを持ち、それを表現する力**」の向上を図るために、次の3つのポイントが大切です。各学校において、授業研究を進める上で、各先生が自らの指導過程や指導方法を工夫する際に役立ててください。

1 「ねらい」が分かる授業づくりをしよう

自分の思いや考えを明確にし、表現する力を養うためには、例えば、文章をただ読むだけでなく、「何のために読むのか」という「ねらい」を明らかにした上で読むなど、子どもたちが主体的に学び、考える活動を通して、課題解決していくような授業を構成していく必要があります。

そのためには、授業のねらいを明確にし、子どもたちにもそのねらいを提示することが大切です。そうすることで、子ども自身が「ねらい」を自覚し、自分の考えを持ちながら学習に向かうことができます。また、一人一人が「なぜ」「どうして」という課題意識を持ちながら、課題解決に向けて自ら考えようとする瞬間を作ることも重要です。そのためには、子どもたちが疑問や見通しを持つことのできるような課題の提示の仕方や発問の工夫等を事前に十分検討しておくことが大切になります。



2 考えることの楽しさを味わう体験を大切にしよう

自分で課題を見付け、自分で考え、分からなかったことが分かるようになったとき、子どもたちは学習への満足感や考えることの楽しさを味わいます。このように、分かる喜びや考える楽しさを味わう体験を授業の中にどのように位置付けていくかが重要となってきます。

このような学習を展開していくためには、互いの意見を交流しながら思いや考えを深めたり、広げたりできる学習課題を設定し、話し合いや討論等を通して、課題を探究し、解決させていくことが大切です。また、個々の思いや考えを引き出し、「なぜそう考えたのか」「その根拠はどこにあるのか」等の思考の過程をたどることにより、自分の考えを明確に表現する習慣を身に付けさせることも重要です。

3 学んだことが使える力を育てていこう

学習を通して身に付けた力が、次の学習のどの場面で生かせるのかを、子どもたちが意識できる授業づくりをしていくことが大切です。また、他の教科や日常生活、読書活動などで生かせる喜びを子ども一人一人に味わわせることも大切です。

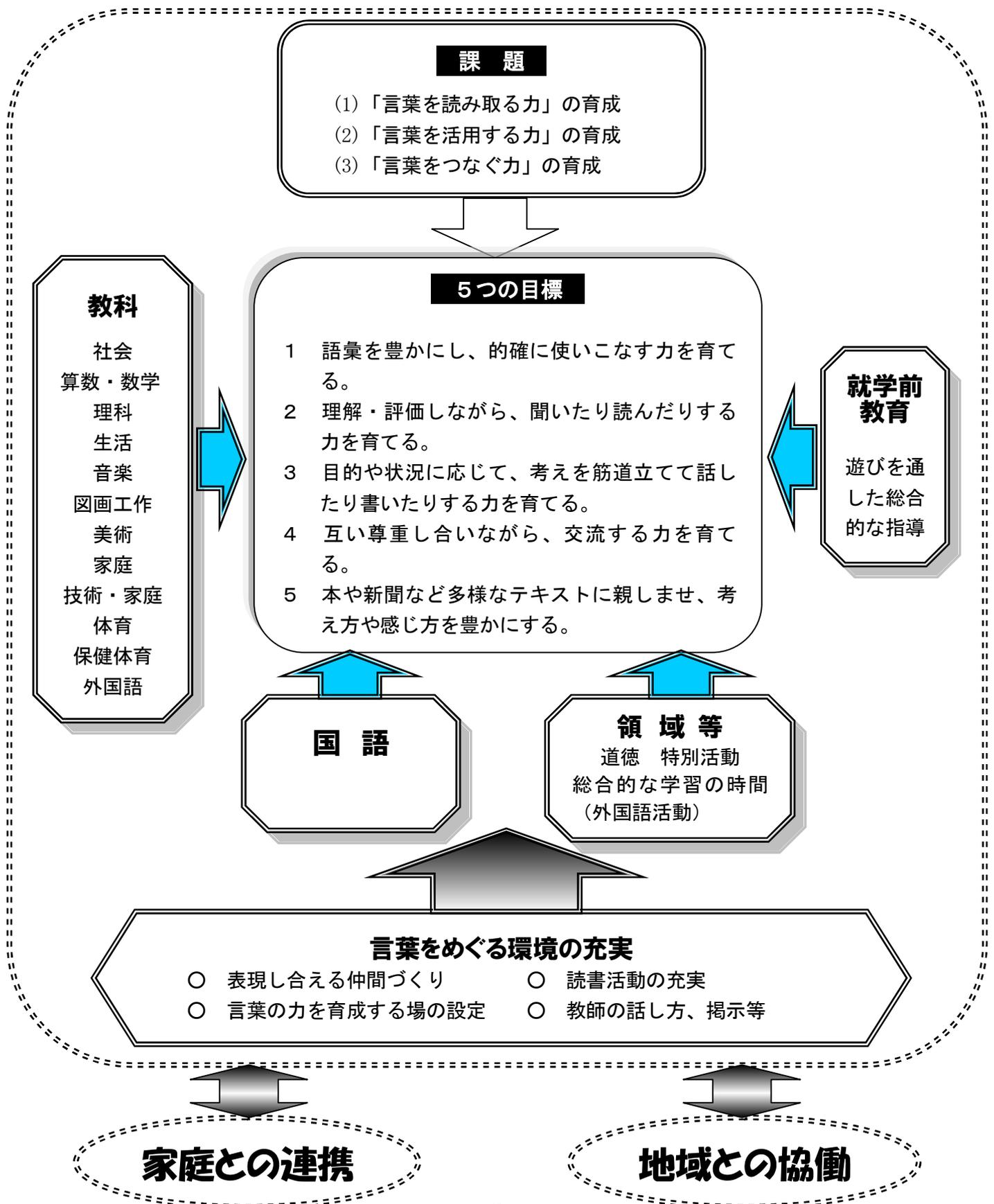
こうした学習を展開していくためには、日常生活での活用場面を想定しながら学習できるようにしたり、実生活での活用を促しながら学んだことが使えるようにしたりしていくことが重要です。

学びの成果を実感し、それを次の学習に生かす喜びが味わえるような授業を構成しながら、自分の考えを持ち、表現する力を育てていくことが大切です。

PISA調査の結果から、子どもたちの現状として、読解力や記述式の問題等の課題が明らかとなりました。そこで、学習指導要領においては、言語活動の充実が重視されています。

「自分の考えを持ち、それを表現する力」の向上を図るためには、言葉の力の育成が欠かせません。そこで、次のような全体像を示しますので、各学校において体系的、組織的に授業改革に取り組む際の参考としてください。

言葉の力育成のための学校における取組(全体像)



2 授業改革推進事例

(1) 〈国 語〉授業改革の視点

全国学力・学習状況調査から

〈本県の課題〉

- 学力調査では、
 - ・文章やグラフ等から必要な情報を取り出す
 - ・目的に応じて必要な情報を取り出し、条件に沿って事実や考えを書く
などの問題の正答率が低く、無解答率が高い傾向が見られました。
- 児童・生徒質問紙調査では、
 - ・話の組み立てを工夫して意見を発表する
 - ・理由が分かるように自分の考えを書く
などの項目で、特に中学生の肯定的回答の割合が低く、自分の考えを表現する指導にかかわることに課題が見られました。
- 学校質問紙調査では、
 - ・様々な文章を読む習慣を付ける授業
 - ・様々な考えを引き出したり、思考を深めたりする発問や指導
などの実施状況が低い傾向が見られました。

学習指導要領から

〈改訂の趣旨〉

国語科の学習指導要領改訂では、

- ・国語に対する関心を高め、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本となる国語の能力を身に付けること
- ・我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てること
に重点を置いた改善が図られています。

実生活で生きてはたらく国語の能力を身に付けさせるため、実生活との関連を図りながら、児童生徒が主体的・意欲的に学び、指導事項を的確に指導できるような言語活動の充実が求められています。

また、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、古典の指導については、知識面を重視するのではなく、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することが求められています。

学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、本県の課題を解決するためには、児童生徒の国語に対する関心を高め、**言語活動の充実**を図ることで、「**目的に応じて必要な情報を読み取り、表現する力**」の育成を重視して授業改革を推進する必要があります。

そこで、特に「書くこと」、「読むこと」の指導で、主に次のような4つの視点から「**目的に応じて必要な情報を読み取り、表現する力**」の育成を図る言語活動を展開できるように、P4～P7の改善の具体例を参考に工夫してみましょう。

授業改革の視点

言語活動の充実

- | | | |
|--------|---|----------------|
| 「書くこと」 | ○ | 書くことへの抵抗感を軽減する |
| 「読むこと」 | ○ | 豊かに想像させる |
| | ○ | 自分の考えを持たせる |
| | ○ | 古典に親しみを持たせる |

「目的に応じて必要な情報を読み取り、表現する力」の育成

● 書くことは楽しいと実感させる

「書くこと」の学習では、次の点が大切です。

○伝えたいという意欲

○書けそうだという見通し

身近な生活や経験の中から、書く必要がある事柄を取り上げ、「書くこと」が楽しいと実感させることにより、「書くこと」への抵抗感を軽減する授業を考えましょう。

● 書く活動を充実させる

低学年では、まず書き方より、できるだけ多く文を連ねて書かせることが大切です。多くの文を書けば、まとまりを意識するようになり、中学年以降の段落意識に円滑に移行できます。

次のような書く活動を計画的に取り入れることにより、書くことが多くても楽しいと実感させる工夫をしましょう。

① たくさん書かせる活動

「夢物語」「もしも作文」といったテーマで、細かいことを気にせず、たくさん書かせる。

「休み時間にしたこと」などの作文でもよい。

② 詳しく書かせる活動

「窓から見える景色」「先生のしたこと」といったテーマで、できるだけ詳しく書かせる。

③ 順序よく書かせる活動

「あさがおの育て方」「目玉焼きの作り方」といったテーマで、順序よく書かせる。

④ 視点を変えて書かせる活動

鉛筆の立場になって教室の様子を書く「なりきり作文」、本番を迎える前に運動会の様子を想像して書く「未来作文」で、視点を変えて書かせる。

文に番号をつけて、文の量を認め合ったり、詳しく分かる文を探したりするといいね。順序を確認めるときのにも便利だよ。



展開の具体例

■ 単元名「お気に入りの本を紹介しよう」
【ねらい】

目的や意図に応じて伝えたい事柄を整理し、自分の考えを明確にして文章を書くことができる。



【主な学習活動】

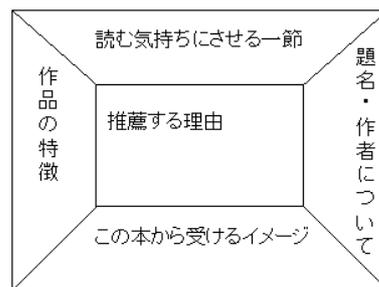
- 1 教師が作成した本の紹介文を読む。
悪い文例として教師が作成した本の紹介文を読んで、紹介の仕方の分かりにくいところを話し合う。



「この本は、とてもためになる本なので」と書いてあるけど、何がためになるか分からないよね・・・。

- 2 紹介文を書き換える。
実際にその本を読んで、示された紹介文を書き換える。
- 3 専門家等が書いた紹介文と読み比べる。
自分が書き換えた紹介文と読み比べて、本を読む気にさせるための表現の工夫を見付ける。
- 4 自分のお気に入りの一冊の紹介文を書く。

※書く前の構成メモの例



● 叙述を手がかりにして想像させる

文学的な文章の学習では、次の点が大切です。

○どのように感じたか。

○「どの部分から」そう感じたか。

○その部分は「どのように」書かれているか。

登場人物の立場や状況を確認した上で、登場人物の気持ち(心情)が、「どのように」「なぜ」変わったのかを地の文や会話、行動など、叙述を手がかりにして、さらに豊かに想像させましょう。

会話や文末の表現、比喩表現などに気を付けて読むと、気持ちの変化がよく分かるよ。



登場人物の性格を想像したり、登場人物同士の関係や設定がどういう意味を持つかなどを考えながら読んでみると、新しい発見ができるよ。

● 表現活動と関連させる

基本的な読み取りを行った後に、発展的に表現活動を行うことはありますが、そこで行う表現活動が、それまでの読むことの学習指導と関連した指導になりにくい場合があります。

例えば、『〇〇の日記』を書く」という課題を示した上で読ませることで、目的意識が明確になり、叙述と登場人物の気持ち(心情)を関連付けて、想像しながら読むことができるようになります。

また、表現することで、さらに内容理解を深めることができます。

展開の具体例

■ 単元名 「ごん日記を書いて、二人の心のつながりを読み取ろう」

教材 「ごんぎつね」(新美南吉)

【ねらい】

ごんの状況や言動に着目して「ごん日記」を書いて交流することで、ごんの言動を解釈し、兵十を思う気持ちを想像することができる。

第1次 全文を概観する。



ごんのしたことを中心に全文を読んで、あらすじを確認する。「ごん日記」の書き方を知る。

第2次 場面ごとに「ごん日記」を書き、交流する。



日記に記したことをもとに、「どの言動をどう解釈しているのか」について話し合う。

第3次 「ごんの気持ちは通じたのか」について考える。



最終場面の「兵十日記」を書いて、作品の主題について考える。

第4次 「心が通じたこと・通じなかったこと」をテーマに短作文を書いて発表し合う。



「ごん日記」を書くことで、なぜそのような行動をしたのかを考えやすくなったね。

次は、ここで身に付けた読み方《登場人物の言動を解釈する、登場人物の言動をつなぐ》を使って、他の心をつなぐことをテーマにした本も読んでみよう！

● 表現の工夫に着目して考えを持たせる

説明的な文章の学習では、次のことが大切です。

○筆者が「何に」対して「どんな考え」を持っているか。

○それを「どんな事例」によって説明しているか。

これらについて考え、評価しながら読ませるために、「文章の構成や展開」、「表現の仕方」などの表現の工夫やその効果に着目させ、共感や疑問、発見など、自分の考えが持てるようにしましょう。

● 表現活動と関連させる

自分の考えを持たせるため、取り入れる表現活動を工夫して、筆者の工夫に着目しやすくしましょう。

例えば、「筆者の主張を予想して書く」という表現活動を単元の中心に位置付け、目的意識をもって読ませることにより、無理なく文章の構成や展開に着目させることができます。

また、それぞれが予想して書いた結論は、小グループで交流させる場を設け、叙述を根拠に考えを交流し合うことにより、内容理解を深めることもできます。

この他にも、目的に応じて複数の文章や情報を比較して読み、筆者のものの見方や考え方に対して、共感や疑問、批判などの考えを持たせ、自分の考えを広げたり深めたりさせることが大切です。



説明文の学習は、読んで要旨をまとめることが中心だったけど、筆者の表現の工夫を評価しながら読み、自分の考えを持つことが大切なんだね。

展開の具体例

■ 単元名「筆者の主張を読み解こう」

【ねらい】

筆者の主張が書かれている結論部分を予想しながら読み、筆者の意図を解釈し、自分の考えを持つことができる。

【主な学習活動】

- 1 結論部分以外を通読する。(説明文)
- 2 筆者の主張を予想する。

文章の構成や展開、表現の仕方等を手がかりに、結論を予想しながら読む。



文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見を区別しながら読むと論理の展開がつかみやすいわ。

- 3 筆者の主張を予想して書く。
叙述を根拠にして筆者の主張を予想して書く。
- 4 小グループで交流する。
根拠に対する結論のまとめ方の違いを客観的に検討し合う。

根拠にしている事柄が同じでも、そこから導き出される結論が違うこともあるんだな。



- 5 筆者の主張を読む。
自分が書いた結論と筆者の結論を比較し、共通点や相違点をまとめる。

※ 筆者の結論が正解で、それに合っているかどうかを問題にするのではなく、筆者の意図を解釈できるようにすることが大切です。

- 6 自分の考えをまとめる。
筆者の意図を理解した上で、筆者の主張に対する自分の考えをまとめる。

● 古典を身近に感じさせる

古典の学習では、次のことが大切です。

○古典特有のリズムを味わわせる。

○古典の世界を想像し、親しみを持たせる。

古典特有のリズムは、繰り返し音読することにより気付かせる必要があります。

また、現代語訳を手がかりにすることで、そこに描かれている情景や人物の心情を想像しながら読むことができます。

現代語訳や解説文などを効果的に取り入れ、古典に表れたものの見方や考え方、登場人物や作者の思いを身近に感じさせる工夫をしましょう。

● 表現活動と関連させる

様々な表現活動と現代語訳とを効果的に組み合わせれば、主体的な古典学習により、一層古典に親しみが持てるようになります。

① 群読を取り入れた活動

平家物語の「扇的」を、「だれが、どこを読むか」、あるいは、「何人で、どのように読むか」などをグループで相談させることで、自然に臨場感あふれる場面への理解が深まり、文語の響きを味わうことができます。

② 創作を取り入れた活動

枕草子の「春はあけぼの」で、原文の表現形式を活用して現代版「私の『春はあけぼの』」を創作させることで、作者と同じ立場から改めて作者の表現の豊かさに気付かせることができます。

さらに、それを作者あての手紙の中に書いて送るという場を設定することで、古典の世界がより身近に感じられるようになります。

展開の具体例

■ 単元名「私の『春はあけぼの』」を創作して、作者に届けよう」
教材「春はあけぼの」（枕草子第一段）

【ねらい】

作者のものの見方や考え方に触れ、古典の世界を身近に感じ、古典に親しむことができる。

【主な学習活動】

- 1 季節に対する思いを交流する。
自分が好きな季節の中で、一番すばらしいと思うときと風物について話し合う。
- 2 原文を音読する。
一斉、グループ、ペア、個人などの変化を付けて何度も読み味わう。
- 3 現代語訳を読む。
- 4 作者の季節感を味わう。
1で交流した自分の季節感と作者の季節感を比べ、共通点と相違点を話し合う。
- 5 原文を音読する。
原文に触れ、表現の工夫や効果、文語表現のよさを味わう。



古典は難しくて昔のことと
思っていたけれど、現代語
訳を読んで原文を読むと、
原文のよさが分かり、古典
が身近に感じられるね。

- 6 私の「『春はあけぼの』」を創作する。
4で整理した共通点と相違点を意識しながら、原文の表現形式を活用してオリジナルの「春はあけぼの」を創作する。
- 7 作者あての手紙を書く。
手紙の中に自分の作品の紹介と作者の季節感に対する感想を交えて書く。

清少納言になった気分
で書いてみると、改めて
作者の表現の巧みさ
が実感できたわ。



(2) 〈算数・数学〉授業改革の視点

全国学力・学習状況調査から

〈本県の課題〉

- ・面積についての感覚がある。
- ・数量やその関係を表現するために、言葉や数、式、図などを用いて自分の考えを記述する。
- ・資料に含まれる多くの情報の中から必要な情報を選択する。
- ・グラフの特徴をもとに表されている内容を読み取り、相違点を説明できる。
- ・数量の関係を文字式で表現したり、文字式をよんだりする。
- ・与えられた表にもとづいて関数の式を求める。
- ・数や図形に関する性質を予想し、その性質などが成り立つことを説明する。
- ・事象を理想化・単純化して数学の問題としてとらえ、その問題を解決するために数学を活用する。



学習指導要領から

学習指導要領改訂では、算数・数学的活動を重視することが明示されています。

○ 算数的活動

- ・「式と場面を結び付ける」
- ・「長さや体積を比べる、見当をつける」
- ・「図や式（グラフ）に表し説明する」
- ・「意味、理由、方法を説明する」 等

○ 数学的活動

- ・「既習の数学をもとにして数や図形の性質を見出す」
- ・「日常生活で数学を利用する」
- ・「数学的な表現を用いて説明する」 等



これらの活動は、今までも重要とされてきた活動ですが、新学習指導要領ではより一層充実することが求められています。指導内容そのものではなく、算数・数学的活動自体が「A 数と計算(数と式)」等の領域に並ぶ柱となった点は重要です。

このように、本県の課題や学習指導要領改訂で求められる方向を踏まえ、算数・数学科では、授業改革の視点を次のように考えています。

授業改革の視点

算数・数学的活動のより一層の充実を通して、

- ①基礎・基本の確実な定着を目指した授業づくり
- ②表現力や活用力の育成を目指した授業づくり



小・中学校で、これらの視点で授業づくりを考えることが、これからの算数・数学指導では重要となってきます。こうした授業が展開できるよう、P9～P12の改善の具体例を参考に工夫してみましょう。

● 数量や図形の感覚を豊かにする

算数の基礎・基本を確実に定着させるためには、算数的活動を工夫し、数量や図形についての豊かな感覚を育てることが大切です。授業では、次に挙げるような算数的活動を積極的に取り入れましょう。

<数についての豊かな感覚>

- ① 数を多面的に見る活動
- ② 数を相対的に見る活動
- ③ 数の増え方のリズムを感じる活動
- ④ 数のおよその大きさをとらえる活動
- ⑤ 数の並び方の規則性を見付ける活動

<量の大きさについての豊かな感覚>

- ① 量の大きさをとらえる活動
- ② 量の見当付けをする活動
- ③ 基本的な単位の量の大きさについて、およその大きさを示す活動
- ④ 適切な単位や計量の選択する活動

<図形についての豊かな感覚>

- ① ものの形を認めたり、その特徴をとらえたりする活動
- ② 身の回りにある幾何学模様などの図形的な美しさに気付く活動
- ③ 図形を構成したり、分解したりする見通しを持つ活動
- ④ 図形を多様な観点から見る活動

● 基本問題と練習問題の間に類題を設定

本時の中心となる基本問題の後、練習問題に入る前に、基本問題の場面や数値を少しだけ変えた類題を準備しましょう。類題をもう一度解くことによって、基本問題の解き方や考え方の確かな定着を図ることが可能になります。理解があいまいなまま練習問題をさせると、間違った理解を定着させることにもなりかねません。

展開の具体例

■ 数を多面的に見る。

38+102を工夫して計算しましょう。

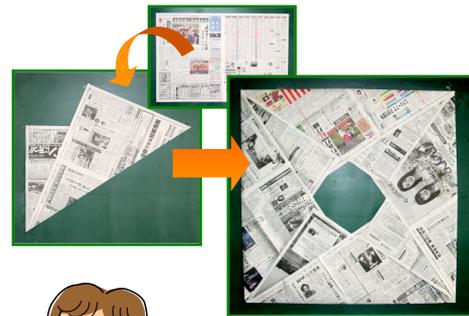
$$\begin{aligned}
 &38+102 \\
 &= (40-2) + (100+2) \\
 &= (40+100) -2+2 \\
 &= 140-0 \\
 &= 140
 \end{aligned}$$



38は40より2小さい数、102は100より2大きい数だから、40+100でいいんだね。

■ 基本的な単位の量の大きさを作る。

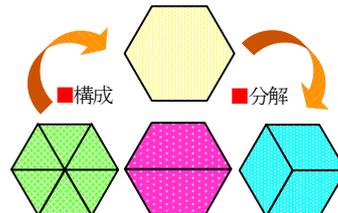
1m²の大きさを新聞紙で作ってみましょう。



新聞紙の対角線は大体1mになっているわ。これを使って1m²の正方形を作ると、きれいな形ができるね。

■ 図形を構成したり分解したりする。

パターンブロックで正六角形を作りましょう。



■ 類題を全員で解いて確認する。

基本問題

あめ2ことあめ3こをあわせるといくつ?

類題 ※数値を変えただけの問題

あめ2ことあめ4こをあわせるといくつ?

練習問題 ※たす集合と数値の両方を変えた問題

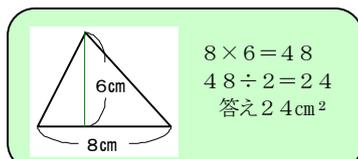
花4本と花2本をあわせるといくつ?

● 数学的な表現様式を変換する場をつくる

問題を解くときや、自分の考えを分かりやすく説明する際には、言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いることができるようにすることが大切です。

● 考えを説明する活動を重視する

式や図を読み取る活動などを積極的に取り入れ、考えを説明する活動を充実させることが大切です。



太郎くんは、どのように考えたのか、図や言葉で説明しましょう。



話し合いが発表会にならないようにするためには、すべてを一人に説明させるのではなく、発表を途中で止め、他の児童にその続きを説明させるなどの工夫を取り入れましょう。

● 既習事項を活用する場をつくる

学習したことを活用する場は、「①日常生活への活用」「②総合的な学習の時間や他教科への活用」「③次の算数の学習への活用」の3つが考えられます。特に、③の活用では、「既習事項を使うと解決できた」という経験を日々の授業で積み重ねることが大切です。

展開の具体例

■ 単元名「分数のたし算」

【ねらい】

同分母分数のたし算の計算の仕方を考えることができる。

【主な学習活動と指導上の留意点】

1 問題をつかむ。

$\frac{1}{5}$ リットルのコーヒーと、 $\frac{2}{5}$ リットルの牛乳を混ぜて、コーヒー牛乳を作ります。
何リットルのコーヒー牛乳ができるでしょう。



$$\frac{1}{5} + \frac{2}{5} = \frac{3}{5}$$

答え $\frac{3}{10}$ リットル

かおりさんはどのように考えたのでしょうか。また、かおりさんの考えが、正しいか間違っているかを考え、その理由を説明しましょう。

- ・問題提示は、たす2つの量を□で示し、最初は整数で考えていく。
- ・かおりさんの考えの正誤について考える学習であることをつかませる。

2 自力解決する。

- ・図（数直線、マス図など）を使って説明を考えさせる。

3 自分の考えを説明する。

- ・全体で説明する前に、隣同士などの小グループで自分の考えを説明する場を設ける。
- ・かおりさんがどのように考えたかを先に発表させる。

4 類題をする。

- ・牛乳の量を $\frac{3}{5}$ リットルに変えた問題を提示する。

5 練習問題をする。

- ・コーヒーと牛乳の両方の量を変えた問題を練習問題とする。その際、1問は、答えが1リットルを越えるものも含める。

6 学習のまとめをする。

- ・同分母分数の計算方法をまとめる。

● 意味理解を伴った指導をする

解法の手順を覚えさせ、機械的に計算練習をさせるだけでは、基礎・基本の定着を図るためには十分ではありません。

右の例で、分数の式の計算の場合、方程式の解き方を学習した後では、分母を払ってしまう誤答が見られます。その際、方程式の解法における式の変形と式の計算の変形との意味の違いを押さえ、なぜこのような変形をしたら間違いなのかという意味理解を図る必要があります。

こうした質問をすることで、根拠となる事項を明らかにし、確実に意味理解できるよう指導していく必要があります。

● 「学び直し」の視点を持つ

新たな内容を指導する際に、すでに指導した関連する内容を意図的に再度取り上げ、学び直しの機会を設定することが効果的であることはいまでもありません。大切なことは、教師がその視点を持ち、授業の中にどのように効果的に組み込むかです。

右の例で、第2学年で2種類の文字の項がある式の計算を指導するときに、1年の式の計算を学び直すことで、文字式の計算の定着を図ることができます。また、関数 $y = ax^2$ を学ぶときに一次関数を学び直すことで、変化の割合の理解がより深まることが期待できます。

● 授業を家庭学習につなげる

学習した内容を自分の言葉でまとめたり類題を解いたりすることで、理解を確実なものにしていくことができます。そのために、家庭学習で、授業を振り返ることのできるような手だてを工夫することが大切です。

こうした積み重ねが一人一人のつまずきの早期発見にもつながります。

指導の具体例

■単元名 第1学年「式の計算」

$$\frac{2x+5}{3} + \frac{3x+8}{2} \text{ を計算しなさい。}$$

(誤答例)

$$\begin{aligned} \frac{2x+5}{3} + \frac{3x+8}{2} \\ = 2(2x+5) + 3(3x+8) \end{aligned}$$

どうして6倍したらだめなのかな。



■単元名 第1学年「方程式」

$$\text{方程式 } \frac{2x+5}{3} = \frac{3x+8}{2} \text{ を解きなさい。}$$

$$\frac{2x+5}{3} = \frac{3x+8}{2}$$

$$2(2x+5) = 3(3x+8)$$

$$4x+10 = 9x+24$$

$$-5x = 14$$

$$x = -\frac{14}{5}$$

両辺に同じ数をかけても等式が成り立つからだわ。



■単元名 第2学年「式の計算」

$$(6a+8b) - (4a+3b) \text{ を計算しなさい。}$$

$$(6a+8b) - (4a+3b)$$

$$= 6a+8b-4a-3b$$

$$= 2a+5b$$

$$\begin{aligned} \text{第1学年で多い誤答} \\ (6a+8) - (4a+3) \\ = 6a+8-4a-3 \\ = 2a+5 \\ = 7a \end{aligned}$$

「学び直し」で $2a+5=7a$ が誤りだと気付いたぞ。今度は間違えないよ。



● 数学的に説明し伝え合う活動の重視

右の展開例では、性質を予想したり、予想した性質を説明したりする場面があります。

例えば、3の倍数と予想した生徒には、どうしてそう考えたか根拠を明らかにするよう指導したいところです。「33になったので、3の倍数です。」グループで話し合い活動をすることによって、「66や110になるのに、それでいいのかな。」など意見が交わされ、練り上げられていきます。こうした活動の積み重ねが、表現することを楽しむ生徒を育成します。

● 既習事項を活用する場をつくる

「活用」というと日常生活や社会を対象にすることばかり考えがちです。右の事例のように、すでに学習した事柄を次の学習で活用する場面を積極的に取り入れることが大切です。

この場合は、11の倍数だから
 $11 \times (\text{自然数})$ の形に変形すればいいんだ。同じように考えると解決できそう。



● 振り返る活動を重視する

$11(x+y)$ という式は、11の倍数という見方だけでなく、他の見方もできます。活動後に振り返ることによって、どのような数学的な見方や考え方、知識や技能が活用されたか、さらに新たな発見はないかなどについて意識させます。つまり、生徒に活用するよさを実感させ、さらに「もし〜だったら、……だろうか」という活用しようとする態度を育てていきます。



3けたの数でも、1の位と百の位を入れかえた数の差には、何かきまりがありそうだ。
 $321 - 123 = 198$
 $514 - 415 = 99$
 他にも調べてみよう。

展開の具体例

■ 単元名「式の計算」

【ねらい】

数の性質を予想、類推し、文字を用いた式に表して考察したり、説明したりすることができる。

【主な学習活動と指導上の留意点】

1 問題をつかむ。

直樹さんは、2けたの自然数と、その数の十の位の数と一の位の数を入れかえた数の和がどんな数になるか考えています。このとき、性質を予想し説明しなさい。

12のとき $12+21=33$
 15のとき $15+51=66$
 23のとき $23+32=55$
 55のとき $55+55=110$

いつでも
 11の倍数
 になるの
 かな。



2けたの自然数と、その数の十の位の数と一の位の数の和は、11の倍数になる。

・「～は、……になる。」という形で主語と述語を明確にして表現できるようにする。

2 説明の見通しを持つ。

・式を $11 \times (\text{自然数})$ の形にすればよいという見通しのもとに具体的な例で確認する。

3 解決し、自分の考えを説明する。

・よりよい説明に手直しする活動を取り入れる。

4 問題を発展させ、和を差にするとどのような性質が成り立つか、予想し説明する。

・生徒が自由に予想し、その予想を表現する活動を取り入れる。

5 学習のまとめをする。

(3) 〈社 会〉授業改革の視点

平成18年度岡山県学習到達状況調査及び 特定の課題に関する調査(文部科学省)から

〈社会科の課題〉

○平成18年度岡山県学習到達状況調査

- ・資料を活用し読み取った情報から社会的事象の意味や働きを筋道立てて考えること
- ・複数の資料から必要な資料を選択したり、根拠として活用したりして、自分の考えを文章で表現すること

○特定の課題に関する調査(文部科学省)

小学校

- ・多様な資料の中から問題を発見・把握する力が十分身に付いていない

中学校

- ・単語としては知っていても、概念の意味を理解したり説明する力は十分でない
- ・地形図や資料を読み取り、比較しながら、分かったことをまとめる力が十分身に付いていない

以上のような課題があることが明らかになりました。

学習指導要領から

〈改訂の趣旨〉

社会科の学習指導要領改訂では、習得・活用・探究という考えにもとづき、小学校、中学校及び高等学校を通じて、

- ・習得すべき知識、概念の明確化
 - ・地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること
 - ・社会的事象の意味・意義を解釈すること
 - ・事象の特色や事象間の関連を説明すること
 - ・自分の考えを論述すること
- などが重視されています。

また、特に小・中学校を通して学んだ社会科7年間のまとめとして、中学校第3学年公民的分野の最後の単元では持続可能な社会を形成する観点から、よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を探究し自分の考えをまとめさせる学習が設定されています。

このように本県の課題や学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、単にワークシートの穴埋めしたり、事実に関する知識を調べさせる学習だけではなく、課題を解決するために必要な**社会的な見方や考え方を養う**ことを重視した学習や児童生徒自らが社会的な見方や考え方を活用し、**課題に対して根拠を示しながら意見をまとめる学習**を充実させていく必要があります。

そこで書く活動に着目し、小学校を例に事象間の関連に着目して社会的な見方や考え方を培うノート具体例、中学校を例に根拠を示しながら自らの意見を分かりやすくまとめるレポートの指導例を示しました。P14～15の改善の具体例を参考に工夫してみましょう。

授業改革の視点

「根拠をもとに書きながら考え、説明する活動の充実」

- 調べたことを関連付けてまとめさせる
- 書き方のフォーマットを示しながら、自分の考えをまとめさせる

改善の具体例

調べたことを関連付けてまとめさせる 《小学校》

● 書いて考えさせる

「調べたことを記録し、調べたことの間連を考え、まとめる」という一連の学習活動は、特に小学校社会科の授業における中心となるものです。それに書く活動をうまくからみ合わせるならば、学習内容の深まりが期待できます。

書く活動には、次のような働きがあります。

- 文字で記録し、分かりやすく伝える
- 文字や図などに表して考える

特に、社会的事象の間連や特色を説明することが求められる社会科では、二つめの「文字や図などに表して考える」働きが重要になってきます。



● 自分の言葉で学習内容をまとめさせる



児童が、調べたことを矢印や囲みなどを使いながら相互の間に気付き、自分の言葉で筋道立てて授業のまとめができるようにすることが大切です。自分の言葉で説明できることは、社会的事象の間連に気付き、社会的な見方や考え方が育ってきているということです。また単元の終わりなどには、多面的・多角的な考察へと深めていけるように友達同士で各自のまとめを共有し合ったり、教師のまとめと比較させたりする学習へとつないでいくなどの工夫をしてみましょう。

ノート具体例(6年生)

単元名「貴族の政治とくらし」

児童が授業のまとめとして書く。

「1 聖徳太子が新しい政治をめざす」

今日の学習課題

聖徳太子はなぜ新しい政治をめざしたのでしょうか？それは実現したのかな？

自分の考えのまとめ

聖徳太子は、乱れた大和朝廷を立て直し、天皇中心の政治を行おうとした。聖徳太子が死んだ後その願いは大化の改新につながっていった。

原因

聖徳太子の登場前

学習の内容の相互の関係を矢印で表す。

・豪族どうしの争い

原因と結果、目的と手段、他地域との関係などで整理すると分かりやすい。

聖徳太子の政治
天皇を中心とする政治

蘇我氏と協力

・冠位十二階（能力で）

・十七条の憲法（役人の心得）

（争いごとの禁止、仏教、天皇の命令など）

・遣隋使

（政治のしくみなど、文化を取り入れる）

結果

聖徳太子の死後

天皇中心の政治へ
（中大兄皇子、中臣鎌足の活躍）

・蘇我氏がほろぶ

（大化の改新）

・豪族から貴族へ

・土地と人々は天皇のもの

・遣唐使 ↓

・税のしくみ

※ A 4版のノートサイズの方が書きやすい。

書き方のフォーマットを決めておく

中学校社会科公民的分野の最後の单元には、生徒自身で現代社会についての課題を決めて探究し、自らの考えをまとめる单元が設けられています。生徒は自らの探究活動を行った後に中間発表やディベート、議論などを経て、最終的にレポートにまとめるといった学習をすることになります。



レポートにまとめさせるときには、あらかじめ書き方のフォーマットをベースに書かせていくと、どの生徒にも書きやすく、読みやすいものになります。その際、国語科とも連携する指導を工夫しましょう。

- 書き方のフォーマットの項目例
- ①調査の動機 ②調査の目的 ③調査の方法
 - ④調査の内容と結果の分析
 - ⑤まとめと今後の課題 ⑥参考資料など

習熟度を意識した指導をする

前述の公民的分野に加え、第1・2学年での地理的分野や歴史的分野においても生徒自身が調べたことをまとめる学習が設定されています。

フォーマットに従いつつ、その記述内容の論理性や考えの根拠となる地図やグラフでの示し方など、レポートの完成度を徐々に上げていくことができるよう段階を追いながら指導することがポイントです。

また、生徒同士が論理性や説得力という観点から相互に評価し合う活動などを取り入れることにより、読みやすく書き手の考えが伝わるレポートの書き方を理解することができます。効果的に評価し合う活動を取り入れましょう。

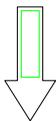


レポートの書き方の指導例

■レポート指導の具体例【ねらい】

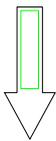
生徒の発達の段階や学習内容に合わせてレポートの書き方に慣れ、自分の考えを論理的に表現することができる。

書き方のフォーマットを確認する



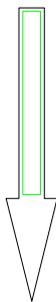
最初は記入する項目が一枚の用紙に一覧できるようになっているもので示す。

項目ごとに箇条書きにする。



項目ごとに必要最低限のことをキーワードで書き込ませる。慣れてくると、文で書くことができるようにする。

自分で調査・探究して分かったことを付せん紙に書き出す。



調査・探究の中心部分については、細かく付せん紙に書き出し、グループ化して、大切だと考えたことを色付けするなど、自分の考えを持てるようにする。社会科ではデータや資料の活用が重要になるため、データや資料の吟味と精選の視点を持たせる。

自分の考えを簡潔にまとめ、短文で表現してみる



最低限、自分の考えを明確にさせる。

必要なデータや資料で自分の考えを補い内容を文でつなぐ。

できれば対立した考え方を示しながら、データや資料から自分の主張が適切にできるかどうかという視点から立論させる。

(4) 〈理 科〉授業改革の視点

平成18年度岡山県学習到達度状況調査から

〈本県の課題〉

- ・現象や現象を起こしている要因について説明する
- ・分かったことを図やグラフに表す
- ・理科の基本的な用語を理解するなどの問題に課題が見られました。

〈改善のポイント〉

- ・児童生徒が結果を図やグラフとして記録したり、その記録をもとに話し合うなど、言葉を使って整理・まとめを行うこと
- ・観察、実験を行う上で児童生徒に見通しを持たせ、結果から何が言えるのかを児童生徒とともに吟味する過程を大事にすること
- ・日常生活や実社会との関連を持たせ、学習したことが実感できたり、学習したことが生かせる喜びを味わえたりするような学習の進め方やまとめ方をすることなどの工夫が大切です。

学習指導要領から

〈改訂の趣旨〉

理科の学習指導要領改訂では、

- ・科学に関する基本的概念の一層の定着を図り、科学的な見方や考え方、総合的なものの見方を育成すること
 - ・科学的な思考力、表現力の育成を図ること
 - ・科学を学ぶ意義や有用性を実感させ、科学への関心を高めること
 - ・科学的な体験、自然体験の充実を図ること
- などが重視されています。

〈改訂の趣旨を踏まえた授業づくり〉

- ・小・中学校の接続や内容相互のつながりを踏まえ、確かな概念形成を図ること
- ・言語活動を充実させ、論理的に問題解決を進めていく手続きを身に付けさせること
- ・自然体験を充実させ、多面的な自然の不思議さ、おもしろさを味わわせることなどの授業が求められています。

このように本県の課題や学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、本県の課題を解決するためには、児童生徒の「**観察、実験結果を図やグラフに表現する力**」「**結果から考察したことを表現する力**」、また、これらの力を発揮するもととなる、「**問題解決の過程をとらえる力**」の育成を重視して授業改革を推進する必要があります。

そこで、上記3つの力の育成を図る授業改革の視点として、「『結果→結論』の過程を重視した問題解決」の授業を提案します。P17～18の改善の具体例を参考に工夫してみましょう。

授業改革の視点

「結果→結論」の過程を重視した問題解決

① 結果を図やグラフに的確に表現させる

② 考察について、結果をもとに論理的に表現させる

○ 問題解決の見通しを持たせる

● 実験の見通しを持たせる

観察、実験を中心とした理科の学習では、「何を、どのように調べようとしているのか」という見通しを持たせることが大切です。

特に、「どのように」の「方法」については、教師が児童に一方的に示すのではなく、右の事例のように、実験計画を立てる段階から児童に考えさせ、ともに確認し合わせることで、児童の目的意識が高まるとともに、実験が計画的、機能的、協力的に進められるようになります。

● 表現の「仕方」を指導する

「図やグラフに表現する活動を組みさえすれば、児童は的確に表現するようになる」ということではありません。

右の事例では、グラフに表現する活動を紹介していますが、児童に表現させる際、

- ・ どの様式のグラフに表現すればよいか
 - ・ それぞれの軸に何を位置付ければよいか
 - ・ 目盛りのとり方は、どうあればよいか
- などについて確認するというような、表現の「仕方」について見通しを持たせた上で取り組ませることが大切です。

● 自分の考えを、図やグラフを使って発表（表現）させる

次に、図やグラフに表現した結果から結論を導く「話し合い活動」が大切になってきます。

そこで求められるのは、児童の話し合い活動を適切に進める教師のコーディネート力です。

発表の場の設定、発表の形態や進行の工夫など、コーディネートの内容は多岐に渡りますが、その中でも、「発表のさせ方の工夫」は、児童の表現力を身に付けさせる上で、特に大切です。

単元の中でどの児童も一度は発表できるようにして、図やグラフの指し方、指した上での話し方など、実践的な発表の指導をしていきます。

展開の具体例

■ 単元名「もののとけ方」

【目標】

物を水に溶かし、水の温度や量による溶け方の違いを調べ、物の溶け方にはきまりがあるという考えを持つことができる。

【主な学習活動】

- 1 「物には、水の温度による溶け方のきまりがあるか。」というめあてを持つ。

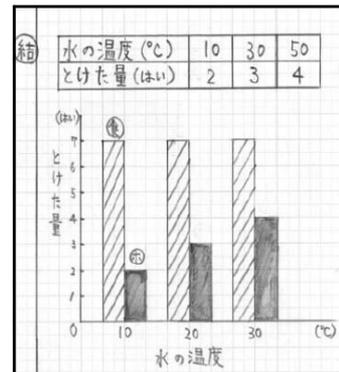
生活経験をもとに予想を立て、それを計画的に調べる方法を考える。

- 2 水の温度を上げて、食塩やホウ酸の溶ける量を調べる。

実験方法を話し合い、水の温度を20℃ずつ上げてそれぞれのときに溶けきる食塩やホウ酸の量を「葉さじ何ばい分」で記録する方法を確認した上で、実験する。

- 3 記録した食塩やホウ酸の溶ける量をグラフに表し、それをもとに溶け方のきまりについて考察する。

縦・横軸の関係や目盛りのとり方などを確認し、棒グラフに表すとともに、分かること（きまり等）を言葉で書く。



※グラフの例

- 4 個々の考えをグラフを活用して説明したり、話し合ったりする。

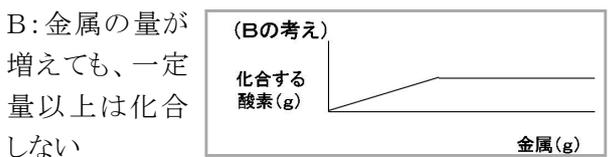
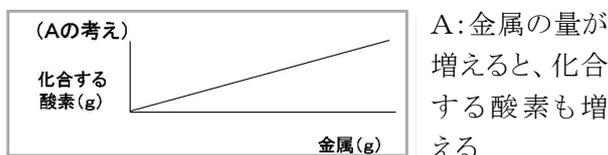
話し合いを通して、「物には、水の温度による溶け方のきまりがあると考えられる」という結論を、共通の言葉でまとめる。

● 図やグラフを使って、実験の見通しを持たせる

理科の観察、実験では、生徒に目的意識をいかに持たせるかが大切です。

目的意識を持たせる上では、「『何を』、『どのように』追究するのか」という実験の見通しを明確にさせておく必要があります。

右の事例では、AとBの2つの異なる予想を簡易グラフに表現させ、「どちらかをはっきりさせよう」と、実験の見通しを持たせています。



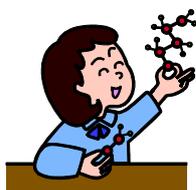
● 客観的根拠をもとに考えを持たせる

考察では、データをもとにした客観的根拠を示しながら、結論を論理的に導くことが大切です。

たとえば、金属の質量と化合する酸素の質量の間には「比例の関係がある」ことを、折れ線グラフを根拠として示しながら説明させたり、「化合する酸素の質量には限度がある」ことを、帯グラフ等を根拠として示しながら説明させたりする必要があります。

● 見えない現象をモデルで表現させる

理科では、右の事例のような化学変化という見えない現象を扱うことが多いため、モデルを用いた表現活動が理解を深める上で効果的です。



酸素と化合する箇所を1つ持った銅、マグネシウムの原子モデルを用い、見いだした一定の関係を説明させます。

展開の具体例

■ 単元名「化学変化の規則性」

【目標】

化学変化に関係する物質の質量を測定する実験を行い、反応する物質の質量の間には、一定の関係があることを見いだすことができる。

【主な学習活動】

- 「金属の質量と化合する酸素の質量の間には、どのような関係があるか。」という学習課題を持つ。

小グループで予想を話し合う。

※話し合いの例

A: 金属の質量が増えると、化合する酸素も増えるんじゃないかな。

B: 金属の量が増えても、一定の質量まできたらそれ以上は結びつかないと思う。

- 小グループごとに「銅の粉末を加熱する実験」と「マグネシウムを加熱する実験」のどちらかで実験する。

- 金属の質量を変えながら実験する。
- すべて化合しきるまで繰り返す。

- 結果をまとめる。

- 次のような表にまとめる。

銅の質量 (g)	0.5	1.0	1.5	2
酸化銅の質量 (g)	0.56	1.12	1.68	
化合した酸素 (g)	0.06	0.12	0.18	

- 銅、マグネシウムの質量と化合した酸素の質量の関係をグラフに表す。

- 結果のデータをもとに、考察について話し合い、まとめる。

※考察についての言語表現例

A: 金属の質量と化合する酸素の質量の間には、比例の関係がある。

B: ある一定の質量の金属と化合する酸素の質量には限度がある。

- 見いだした一定の関係を、分子と原子のモデルを用いてかきまとめる。

(5) 〈英 語〉 授業改革の視点

平成15年度中学校教育課程実施状況調査及び特定の課題に関する調査（「話すこと」文部科学省）から

- 平成15年度中学校教育課程実施状況調査
〈課題として考えられること〉
 - ・話しかけに対して意味をとらえて応答すること
 - ・情報を整理したり、対話の流れを理解したりして読むこと
 - ・与えられたトピックについて内容を考え、まとまった英語で表現すること
- 特定の課題に関する調査（「話すこと」文部科学省）
〈傾向としてとらえられること〉
 - ・日常生活に関わる基本的な単語の発話及び発音は良好である。
 - ・相手の話しかけに対し、状況に即して適切に英語で応答する能力については、定型表現を用いた応答は身に付いている。
 - ・自分の考えや気持ちなどが聞き手に伝わるように話す力に課題がある。

学習指導要領から

〈改訂の趣旨〉

外国語科の学習指導要領改訂では、小学校段階での外国語活動を通じて、音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度等の素地が育成されることを踏まえた上で、4技能を総合的に育成する指導を充実することにより、

- ・自らの考えなどを相手に伝えるための発信する力
- ・コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力
- ・「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する指導が求められています。

また、文法については、コミュニケーションを支えるものととらえ、その意味や機能を十分に理解させた上で、既に学んだ語彙や文法事項との関連を図り、言語活動の中で自分の考えや気持ち、事実などを伝え合うことに活用することが大切です。

学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等を、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信する力の育成を重視して授業改革を推進する必要があります。

そこで、主に次のような3つの視点から「**自分の考えを持ち、それを英語で表現できる力**」の育成を図る言語活動を展開できるよう、P20～22の改善の具体例を参考に工夫してみましょう。

授業改革の視点 コミュニケーション能力の育成

- 自分の考えを自分で工夫して表現する活動
- 自分の考えを表現するための言語材料を習得する活動
- 4技能を総合的に習得する活動

「自分の考えを持ち、それを英語で表現できる力」の育成

● 会話を楽しむ時間をつくる

自分の考えを表現することの基本は、会話によって人とかかわることです。英語で気持ちを伝え合うチャンスは授業を除いてはなかなかありません。授業こそ、英語によるコミュニケーションを実践する貴重な場です。特別な1時間ではなく、毎時間の授業の中に会話を楽しむことができる時間をつくりましょう。

また、授業中は教師と生徒、生徒同士が英語でコミュニケーションをすることが大切です。英語を使わざるを得ない状況、英語を使いたくなる状況などを設定することで、「英語でどう表現すればよいのか」を生徒は自分で考えるようになります。

● 「1文プラス」で会話を広げる

会話の時間を設けるにあたっては、生徒が取り組みやすいようにするための指導が必要です。会話を広げて続けるための応答力を鍛えるために、次のような工夫をしてみましょう。

- 応答はYes./No. だけで終わらず、あと1文を付け足すようにする。
- 相手の言ったことを復唱して確認する。
- より具体的に言おうとする。
- 「どう言えばいいかわからない」という生徒の声を拾い上げていく。



「伝えたいことを英語で表現できた」という実感が自信につながり、「さらに表現したい」という学習意欲にもつながります。「できた」ことをしっかり評価するプラスのフィードバックを大切にしていきたいです。

● ペアからグループ会話・スピーチへ

様々な友だちとのペアでの会話や、グループでの会話、スピーチへと口頭による表現活動を広げていきましょう。ペア活動の時と同じように、相手に気持ちを伝えることを意識してスピーチをさせると、会話からスピーチへの発展も無理なく行うことができるようになります。

会話指導の具体例

■「1文プラス」の指導例（1年生）

(★教師の具体的指導)

A: Do you like sports?

B: Yes, I do.

(★あと1文付け足そう)

I like baseball.

(★相手の言葉を繰り返そう)

A: Oh, you like baseball.

(★質問を考えよう)

Do you play baseball?

B: Yes, I do. I play baseball on Sunday.

(★いいね、その調子で!)



■会話をスムーズにする表現例

Really?

Me, too.

Wow!

How about you?

And then?

I think so, too.

Pardon?

Uh, huh.

このような表現を、生徒が必要とした時に少しずつ教えていくと、会話がスムーズにできるようになります。

一度教えた表現は繰り返し使えるように、カードを作成しておく効果的に示すことができます。

■「3文+質問」の指導例（2・3年生）

(★3文で答えて相手に質問を返そう!)

A: What did you do last Sunday?

B: I went shopping with my sister.

I bought a red T-shirt.

We enjoyed shopping very much.

How about you?

A: I stayed home and.....

スピーチを行う力、友だちのスピーチを聴く力、さらにはスピーチに対して感想を述べる力などを育成することを意識して、学習段階に応じてこのような練習を繰り返し行い、英語で話すことを楽しませるようにしましょう。



改善の具体例 ② 自分の考えを表現するための言語材料を習得する活動

書いて伝える楽しさを味わわせる

口頭では表現できても書く活動となると一気に生徒は困難さを感じる傾向があるようです。

しかし、言語材料を確実に習得させるためには書く活動をより充実させる必要があります。書くことにより文法的な間違いが明確になり、生徒は自分の課題を知ることができます。

単元ごとに自己表現作文を書かせて互いに紹介し合うことにより、書くことに対する抵抗感をなくすとともに、書いて伝える楽しさを味わわせましょう。



イメージを広げるワークシートの工夫

自己表現活動において、生徒が意欲的に取り組めない場合、「何を書いてよいか分からない」ということが多いようです。そこで、どんなことを書けばよいのかを具体的に示すなど、次のような視点をもとにワークシートの工夫をしましょう。

- 具体的な項目を示し構想メモを書かせる。
- 実際に起こりそうな場面を想定して書かせる。
- 単なる文法的な操作にとどまらず、自分の経験にもとづいたことを表現させる。
- 絵・写真・地図などを活用して、人に読んでもらうことを意識して書かせる。
- 振り返り欄を設けて、自己評価をさせるとともにプラスのフィードバックができるようにする。
- 英語が苦手な生徒も取り組みやすいように、参考となる英語表現を示す。

推敲により言語材料を確実に身につけさせる

提出されたワークシートを添削し、まとまりのある文章に推敲する活動や、文を並べかえて適切な文章に再構成させる活動を取り入れることが大切です。

このような指導を継続して行うことにより、言語材料を確実に定着させましょう。



ワークシートの改善例

■ 単元：過去の文（2年生）

〈改善前〉～日記を書こう～

1 例文を日本語にきなさい。

〈例〉 I got up at eight.

I watched TV in the morning.

In the afternoon, I went shopping.

2 例文にならって日記を書きなさい。

〈改善後〉～ある日の出来事を紹介しよう～

1 ある日の出来事を友だちに紹介する文を書きましょう。どんなことを伝えたいか、まず構想メモを書いて整理しましょう。

★どんな出来事を伝えますか？

・いつ？

・どこで？

・誰と？

・どのように？

・感じたこと、思ったことは？

2 絵や写真を使って、わかりやすく伝えましょう。

3 次の書き出しにつなげて書きましょう。



I'll tell you about my holiday.

4 今回の作文について工夫した点や反省点を書きましょう。

○先生からの評価・コメント

◆英語表現集

- ・練習試合をした had a practice game
- ・～に負けた lost the game to ~
- ・3対5で by a score of 3 to 5

● 単元目標を明らかにして学習させる

4技能を総合的に習得させるためには、単元ごとにまとめとして行う表現活動を提示して、単元中の様々な活動が表現活動につながることを意識しながら学習に取り組ませることが大切です。

目標を表現活動（「書く活動」「話す活動」）とすることで、「読む活動」「聞く活動」が表現活動につながる学習であることを意識させ、それぞれの活動に意欲を持って取り組ませましょう。



○表現活動例

**Skit, Debate, Speech,
Show and Tell, Discussion
Interview**

● 辞書の使い方に慣れ活用できるようにする

授業では、新しい単語を教員が別の表現で説明し、その単語の意味を推測させた上で、辞書で確認するなど辞書を使って調べたいような場を設定したり、普段から生徒が辞書を繰り返し使用し、使いたい語や連語、表現を自由に調べたりするような習慣をつけさせましょう。

授業での自己表現活動を自発的に行ったり、家庭で、ラジオ講座の視聴や英語の物語を読むなど、教科書から離れた英語学習に取り組むためにも、辞書を活用できることは必要不可欠です。辞書指導は入門期に行うようにしましょう。

● 場をイメージした英文に触れさせる

英語習得において大切なのは、言語の使用場面と言語の働きを意識しながら、英語を理解し、適切に英語で表現することです。英語が使われている場面をイメージしながら、実際に使われている正しい英文にできるだけたくさん触れさせることが大切です。



日頃から様々なテーマによる英文理解や表現活動を繰り返し行い、表現できる内容の蓄えを増やしてきましょう。

展開の具体例

■ 単元を通しての活動例

① 目標提示

○ 単元ごとのまとめとなる表現活動を示した後に学習に取り組ませる。

（例）「今回は単元のまとめとして教科書のテーマをもとに**Debate**を行います。自分の考えをまとめたり、英語でどのように表現すればよいかを考えながら学習に取り組みましょう。」

② 文法事項指導

○ 言語活動と関連付けて指導する。
○ 実際に活用できるように指導する。

文法はコミュニケーションを支えるものとして指導し、文法用語の解説や用法の区別に深入りするのではなく、実際に活用できるようにすることが大切です。

③ 語・連語の指導と本文理解

○ 語・連語や慣用表現については活用を通して定着を図る。
○ TF、QA等の方法で理解を確認し、和訳による理解にならないようにする。

Debateを目標とし、「書く活動」「話す活動」につながることを意識して「読む活動」「聞く活動」に取り組ませましょう。

④ **Debate** に向けての英作文・ワークシート

○ 教科書の文をモデルに、自分の考えを表現させる。

⑤ **Debate**

○ ワークシートをもとに **Debate** を行う。

⑥ 振り返り・フィードバック

○ **Debate** 及び単元を通しての学習について自己評価や相互評価、教師からのフィードバックを行う。

このような活動を単元ごとに行い、継続的に指導することで、4技能を総合的に習得させましょう。

(6) 〈就学前教育〉

「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」として幼稚園教育要領に示されています。つまり、人格形成の土台を作る時期ととらえることができます。「後伸びする力」と言われるように、土台が幅広くしっかりしていると、後の時期（小学校以降）にどんどん伸びる時期がくるのだとも言われています。

ここでは、後の時期の子どもたちの学力向上を目指し、しっかりとした土台を作るためには、幼児期の教育がいかにあるべきか、重視すべき3つのポイントを示します。

キーワード： 環境構成 援助 感情体験 体験の関連性 学びの連続性 家庭との連携

① 「ねらい」のある保育ができていますか？

環境構成

環境の構成において重要なことは、その環境を具体的な「ねらい」や「内容」にふさわしいものとなるようにすることです。

保育者(幼稚園および保育所で教育・保育する者)は、一人一人の幼児の中に何を育みたいのか、一人一人の幼児がどんな体験を必要としているのかを明確にし、幼児がどのような活動の中でどのような体験をしているのかを考慮しながら、保育者としての願いを環境の中に盛り込んでいくことが重要です。ただ単に、幼児が好き勝手に遊んでいるだけでは、必ずしも発達にとって重要な価値ある体験をしているとは限りません。

援助

保育者は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して、発達に必要な経験が得られるように援助することが重要です。

幼児が環境とかかわり、活動を生み出すきっかけは様々です。使ってみたい遊具や用具、素材と出会い、それらに触れることから活動が生み出されることもありますし、保育者や友達に誘われて一緒に活動に関心を示すこともあります。保育者は、幼児と活動を共にしながら、幼児の活動のきっかけをとらえ、幼児の活動の理解を深めながら、個々に必要な援助を続けることが大切です。

② 幼児の心を動かし、考えることができる体験をしていますか？

心が動く体験

心動かされるというのは、驚く、不思議に思う、嬉しくなる、怒ったり、悲しくなる、楽しくなる、おもしろいと感じるなど、様々な情動や心情がわいてくることです。保育者は、幼児がこのような質的に高い感情体験をすることができるように、意図的に環境を構成するよう心がけましょう。

自ら考えようとする気持ち

心が動かされる体験をした幼児は、様々な思いを巡らせ、感情がわき上がり、その考えや思いを言葉や動きで表現しようとしています。そのとき、自分とは異なった考え方や表現の仕方をする友達を見たり、聞いたりする中で刺激を受け、自分だけでは発想しなかった考え方に気付き、新しい考えを生み出すことができます。このような体験を通して、幼児は、考えることの楽しさや喜びに気付き、自ら考えようとする気持ちが育まれていくのです。

③ 幼児の体験をつなぎ、学びをより豊かにする援助をしていますか？

体験の関連性

心動かされる体験は、一つ一つ独立させるのではなく、他の体験と関連性を持つことにより、体験をより深めることができます。そのために、保育者は次のことを念頭に置く必要があります。

- ① 一人一人の幼児の体験を理解しようと努めること
- ② 幼児の体験を保育者が共有するように努め、共感すること
- ③ ある体験からどのような興味や関心が幼児の心に生じてきたかを理解すること
- ④ ある体験から幼児が何を学んだのかを理解すること
- ⑤ 入園から修了までの幼稚園生活のなかで、ある時期の体験が後の時期のどのような体験とつながりうるのかを考えること

これらの事柄に留意することで、幼児の学びをより豊かにする援助になります。

学びの連続性

幼児期は、知識を教えられて身に付けていく時期ではなく、遊びながら学んでいく時期です。遊びを通して幼児が学ぶ楽しさを知り、積極的に関わろうとすることは、小学校での学習意欲へとつながります。また、遊びを通じた体験は、小学校の教科学習の内容を実感しながら理解することにもつながります。幼児期の一つ一つの遊びが、小学校以降の生活や学習の基盤となります。

家庭との連携

家庭の教育力が低下し、子育てへの不安や孤立感を感じている保護者が増加しています。幼稚園は、保護者との情報交換会などを開き、たとえば幼児の状況を踏まえた保育者のかかわりなどについて話し合う機会を設けましょう。そうした取組は、保護者の幼児教育への理解や幼児へのかかわり方の理解を深めることとなります。そして、こうした家庭との連携を深めることで、幼児の学びがより豊かになります。

3 授業改革を進めるために ～Q&A～

(1) 校内研究の充実

- ① 校内研究をがんばっているのですが、その成果が上がっていないような気がします。
- 校内研究は、授業を中核にし、それを外部に開くことで客観的に検証することが大切です。そのために、近隣の学校に参加を呼びかけたり、大学教官や指導主事を招へいしたりしてはどうでしょう。
- また、参加者に対して、事前に、学校の課題と課題改善に向けた仮説(研究の視点・取組の工夫)を明らかにした学習指導案を配付した上で公開授業を実施すれば、授業後の研究協議で取組の成果と課題がはっきりします。
- ② 教科担任制の中学校では、教科指導力の向上を図る研修を進めにくいです。
- まず、生徒による授業評価を実施し、日々の授業改善を進めていくことが大切です。数学については、県が作成した学習到達度確認テストを活用して、単元ごとの生徒の学習到達状況を確認することで、授業を見直すことができます。
- 次に、全教員が校内研究に対する当事者意識をもち、協働体制をつくっていくことが重要です。そのために、全国学力・学習状況調査や市販の学力検査等の分析結果と併せて、KJ法等の手法も取り入れながら、個々の教員が感じている課題の抽出・共有を図る研修を計画してはどうでしょう。
- たとえば、思考力や表現力、学習態度等が課題となれば、教材・教具の工夫や説明・発表の場づくり等が改善に向けた方策となり、教科を越えて取り組みやすくなります。
- また、授業公開に向けた模擬授業を他教科の教員と行うことで、どのような指導の工夫が生徒に受け入れられるかを客観的に見直すことができますし、教科を越えた授業づくりを進めることで、公開授業後の研究協議が活性化します。
- ③ 公開授業をしても、その後の研究協議が充実しません。
- せっかく学習指導案をつくって授業を公開しても、やりっ放しでは苦勞が報われませんし、授業者と参観者の質疑応答で終わる研究協議では、議論が深まりにくいものです。
- そこで、参加型の研修を工夫してはどうでしょう。参加型研究協議を実施するためには、まず、授業参観の視点(これが協議の柱にもなります)を明らかにすること、次に、その視点に基づき、授業参観カードや付箋紙等を使って授業を見ること、協議では、参観カード等を活用しながら意見交換を行い、グループ協議や全体での協議を組み合わせるなどなどが考えられます。
- 参加型研究協議で使ったカードや、意見を整理した模造紙等を保存すれば、研究の歩みが一目で概観できますし、次の校内研究に役立てることができます。
- 協議の時間が確保できないときは、授業参観カードに見取ったことを記入して、授業者に渡すことも考えられます。校内研究の担当者が、それらのカードから課題や成果等を洗い出すことも効果的です。
- ⑤ 授業改革協力員を講師に招きたいのですが。
- 授業改革協力員は授業改革の中核として、原則として、協力員の所属校において授業研究を進めることとしています。したがって、協力員が授業公開する際には、協力員の学校へ行って、一緒に研修を進めることができます。
- しかし、所管の教育委員会や校長先生との間で協議していただいた上で、長期休業中などを利用して、協力員に依頼することは可能です。



【授業改革協力員とは】

国語、算数・数学、英語教育に関して豊かな専門知識と経験を持った先生方が、所属校での校内研究の企画・運営や、研究授業の校外に向けた公開、学習指導案をはじめ授業展開の好事例などの素材提供などを通して、地域の中核として、授業改革を推進しています。

授業改革協力員からのコメント

中学校区で学力調査を分析したら・・・

中学校区内の各校から研究主任等が集まり、全国学力・学習状況調査の結果を分析しました。

中学校の課題である知識・技能の活用や図形の問題が小学校でも弱いことが分かりました。また、小学校が研究している学習ボードで解き方を発表させる学習を、他の小学校や中学校でも取り入れることにしました。

小・中学校で連携したら・・・

私は中学校英語の授業改革協力員です。中学校区内の小学校で行われた外国語活動の研修に参加し、外国語の指導方法について具体的で実践的な事例を紹介しました。やがて児童が進学する中学校で、どのような学習が行われるかを説明する機会にもなり、小学校の先生に充実した研修になったと言われました。小中の連携の必要性を改めて感じています。

外部講師を活用したら・・・

大学や県教委の指導主事を招聘して授業公開をしました。学習指導案の検討時から指導に入っていただくように計画しました。公開授業の時だけでなく、事前に指導を受けることで、授業改善の視点等を明確にもって授業研究ができました。継続的な指導と客観的な評価を受けることで、授業研究が充実しました。

協働的に研修したら・・・

私は国語の授業改革協力員です。自分が公開する授業に対し、市内全校から先生が集まって教材研究を行うことができました。授業公開後の研究協議も充実し、本校だけでなく、市内の各学校での授業研究に役立ったように思います。

家庭学習について共有したら・・・

中学校では、家庭学習の内容等が各教科の担当に任されていました。生徒によっては、たくさんの問題についていけず、答えを写して提出しているような状況もありました。そこで、家庭学習の効果を上げるために、全教員で内容・出し方等の共通理解を図る機会を設け、次のことを確認しました。

- ・ 事前に提出締め切りを示す。
 - ・ 習得型の課題と活用型の課題を組み合わせる。
 - ・ 授業とリンクした内容を工夫する。
 - ・ シラバス等を作成し、年度当初に内容・ねらい・方法を指導するようにする。
- また、自主学習ノートの模範となるものは、コピーして全校に広げています。

(2) ICTの活用

Q. ICT活用授業の実施についてよく言われていますが、ICTを授業で活用するとどのような効果がありますか。

A. ICTを活用した授業は児童生徒の学力向上に効果的です。

もちろん、ICTを活用することによる学力向上には、教員の授業力が不可欠です。



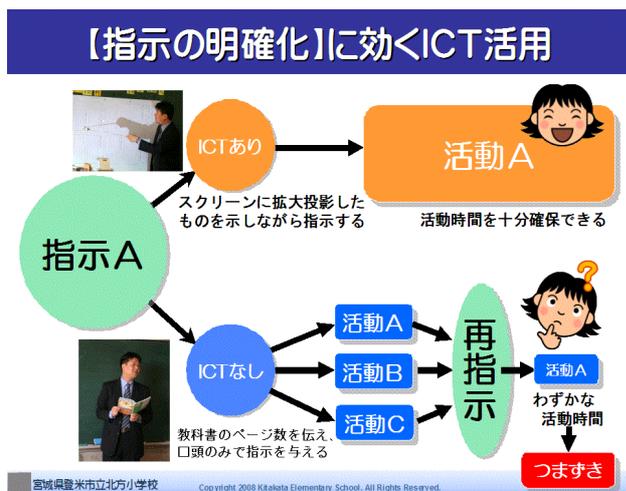
実物投影機を活用した授業場面

例えば、実物投影機とプロジェクタを使って教科書の図を拡大提示することを考えても、「授業展開のどの場面で提示するか」「どのような見せ方をすると効果的か（一部を隠す、線を引く、しるしをつける等）」「拡大提示したときにどんな指示や発問をするか」等、留意しなければならないことがたくさんあります。これらは、ICTを活用する、活用しないにかかわらず、すべての教員の指導力にかかわることです。

ICT活用指導力が高い教員とは、ICTを上手に使う教員のことではなく、ICTを効果的に活用して授業を展開できる指導力のある教員のことです。

特に、ICTは、一斉授業における「学習内容の習得場面」で効果的に活用できます。ICTを使って拡大提示し、全員の子どもに説明・指示を徹底することによって、効率的に知識や技能を習得させることができます。その結果、授業で習得した「知識や技能を活用する時間」を十分に確保することができます。

ICTがすべての学力を高めると考えるのではなく、ICTが効果的に機能する場面を見極め、学習を効率化することによって、思考力や表現力などの学力を育てる時間を十分に確保するという考え方に立つことが大切です。



新学習指導要領の第1章総則、第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項の中に「視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」と記されており、すべての教員がICTを効果的に活用して授業することが求められています。

文部科学省委託事業「ICT活用による学力向上の証しー実証授業による指導の効果検証結果の報告ー」（メディア教育開発センター <http://spa.nime.ac.jp/> 2007）によると、例えば、同事業で実施した児童生徒への客観テストの分析結果を見ると、思考・判断、技能・表現、知識・理解に関する得点が、ICTを活用した授業後にはすべて有意に上昇しています。

また、児童生徒の意識調査を分析すると、授業後は、思考力・表現力、関心・意欲、知識・理解が有意に高まっています。ICTを活用して授業を行った教員の評価結果を見ると、「授業が改善できた」「授業の質が高まった」「指導が変わった」等の肯定的な回答が大半を占めています。

(3) 「学び合う」授業づくり

Q. 子どもたちが主体的に学び合う授業づくりについて教えてください。

A. 「学び合い」「協同学習」等には、様々な理論や指導法、実践例が示されていますが、今回は、県内の県立高校で取り組まれている事例を紹介します。



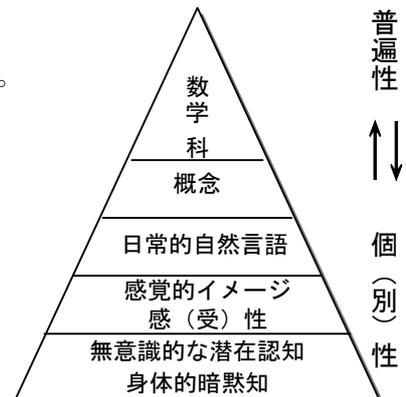
1 めざす学力

15歳を対象とした経済協力開発機構（OECD）による国際的な学習到達度調査（PISA）の結果、日本の2003年の成績が低下したことから、特に「読解力」の育成を柱に学力を向上させることが社会の関心事となり、2007年には文部科学省が小6と中3を対象にした全国学力・学習状況調査を実施しています。この調査では、知識を問う問題（A）と知識を活用する力を問う問題（B）が出題されました。学力は読解力や知識活用力にも焦点が当てられることになりました。

しかし、学力は個において生きる力を生み出す源泉であり、社会においては社会をより良く変革していく創造力の基盤です。とすれば、めざす学力の概念はもっと広い原理的な世界をかたちづいているはずで、いわば、大きな学力と呼ぶべきものです。

右の概念図は、大きな学力を個の知覚階層として示したものです。何ものにも替え難い唯一の実存である個の身体のもつ無意識的な潜在的知覚や感（受）性、感覚的イメージなどの、言葉にならない豊かな個（別）性の世界を、言葉にして分節化することによって伝達・蓄積可能な情報へと抽象化・普遍化したものが概念世界であり、その普遍性の最たるものが数学言語です。数学的あるいは科学的リテラシーは、日常的経験世界の特殊性を捨象した法則性によって現象を分析する理性的能力です。PISA型と呼ばれる、テキストから情報を取り出して解釈・評価する読解力もまた、テキストの内容を読むだけではなく、その構造や価値をメタ（高次の）認知する理性的（あるいは悟性的）能力と言えます。しかし、それらは一方で個別的な身体を通して、こまやかな感受性の働く、日常の経験世界と結びついています。したがって、これらの知覚階層のすべてを分析的に、あるいは重層的に刺激し、高める教育活動こそが大きな学力を育む条件となります。

その意味において、「学び合い」は、日常的経験世界が異なり、身体的条件も多様な個が自らの思考を主体的に伝達し合うことによって普遍的な理解の場を形成するとともに、相手を鏡像として個自身を対象化し、個に自身の個（別）性に思いを致させ、個を強くする重層的な学力向上の方法と言えます。



2 大きな学力と同時に学習する社会力

「社会力」は、社会に協調できる消極的な社会性だけではなく、社会をよりよく変革していく

積極的な社会性を伴った実践力と定義します。「学び合い」は、個が孤立することなく、仲間とともに課題を克服するために助け合い、高め合う良質の経験をとおして社会力を同時に学習する利点があります。個の幸福が周りの人の幸福と結ばれる経験をとおして、個が市民社会の一員としての暗黙知を学ぶことができる場としても「学び合い」の授業の意義があります。

3 効果的な授業づくり

(1) カリキュラムづくり

学校を卒業するまでに子どもたちにどんな力を育てほしいかという教育目標を立て、それを実現するために単元単位の授業計画を積み上げていったものをカリキュラムと定義します。いつどんな学習材を用いてどんな方法で教育活動や授業をすれば効果的かという、いわば実践的教育課程デザインです。たとえば、習熟度別授業の導入も、はじめにありきではなく、個の学びを充実させる方法の一つとしてカリキュラムの中に位置づけられると子どもに効力感が生まれてきます。

(2) 「学び合い」の授業

① 価値的目標の設定

子どもたちが主体的に参加し、学び合い、高め合うには、自分たちの精神的世界が広がる予感や生活経験が豊かになる期待といった価値的目標の共有化が必要です。百マス計算のような技能的熟達だけを目標にしては、知的な快樂が得られないため本気にはなれません。だれもが自分の知らない世界を知りたい欲求を持っています。知的欲求を揺さぶる課題ならば、多量の学習材を与えられても子どもたちは本気で家庭学習をやってきます。家庭学習時間の増加は、価値的目標とその実現方法によるのです。

② 技能的目標の設定

「学び合い」の授業ならではのスキルアップを図りたいものです。話し合いや発表のしかたの技能はもとより、認識や思考を深化させる思考の枠組みも学習します。

たとえば、右図は GROW モデルと呼ばれるコーチングの手順ですが、話し合いのしかたとしても利用できます。類比を発表する際には、「AとBは～という点では共通しているが、Aは……、Bは——という点で相違している」というかたちを学ぶと子どもたちは話し好きになります。速読のしかたにしても、説明

Reality【現状認識】 成果と課題は何か	Options【手段の選択肢】 どんな手段・方法があるか
Goal【目標】 どうすれば発展するか	Will【意思】 何から始めるか

(評論)文ならば、「Aという事柄について、筆者はBと説明(主張)している」というかたちを完成させるという枠組みを共有して、「さあ、AとBに当たるものを探そう」とタイムキーパーをすれば、楽しみながら速読ができて、読解力も向上します。

③ 個の課題の明確化

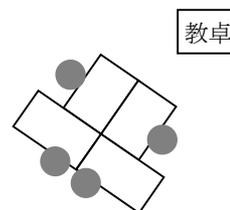
グループで活動する際に注意したいのは、個の課題が明確であることです。授業単位および単元単位で個としての達成目標(評価規準)を明確にすることによって、個は伸びます。グループも学級全体も同様で、何をいつまでにどういう方法を用いてすればよいかという課題を共有することで、教室は活性化し、習熟に時間がかかる子どもをどのように支援することができるかも見通すことができるようになり、形成的評価も可能になります。

④学びの手順の約束事

「学び合い」は、個を伸ばすことによって効力感を増します。そのためには、必ず個人思考の時間を設定し、それからグループ思考、教室全体による思考、そして個人の振り返りという往還が必要です。個人レベルで分からなくても構いません。一人では分からないことを知ることが、学びへの動機付けになります。

⑤「学び合い」を促す机の配置と班構成

子どもたち同士が最も接近する机のかたちは、自然と話が弾みます。グループの人員は4人を原則とし、できるだけ学力・性別・性格などが異質な集団になるように構成するとより豊かな学びになります。教室やメンバーの配置にも学習集団の一体化が生まれる工夫が必要です。



⑥「ジグソー2」という方法

「学び合い」は、多様なかたちがあり、どんな力を育むかという目標を実現しやすい方法でよいのですが、「ジグソー2」はだれもが取り組みやすい普遍性をもった授業スタイルの一つです。

「ジグソー」は、授業や単元などの課題を解決するために、(a)グループの4人がそれぞれの課題の分担を決めた後、(b)それぞれの課題ごとの専門家（役割担当者）が集まって知恵を出し合い、自分のグループのメンバーに教える準備をし、(c)グループに戻って自分の分担箇所を教え合い、討論する、というステップを踏みますが、「ジグソー2」は(a)の課題を最初からグループで共有してから役割を分担します。グループのメンバーのだれかが役割をうまく果たせないときに他のメンバーが助けやすい、能力の高いメンバーがすべての役割に精通することもできるといった利点があります。これは、課題と学習材を工夫すれば小・中・高校のどの段階にも応用の効く魅力的な方法と言えます。

⑦評価の工夫

子どもたち自身が、「学び合い」の授業をとおして成長できた実感をもつことが次の学習への大きな動機づけになります。授業や単元ごとに達成感の得られる評価を工夫することが重要です。

岡山県立岡山操山高等学校 教諭 香山真一

【参考文献】

- * 杉江修治『学び合い、高め合う授業の創造』（一粒社）2003年3月
- * 犬山市立楽田小学校編『学び合う子ども 高め合う教師』（教育新聞社）2009年3月
- * 山下勲『世界と人間』（晃洋書房）2001年7月
- * 中田基昭『感受性を育む 現象学的教育学への誘い』（東京大学出版会）2008年6月
- * 佐藤学『習熟度別指導の何が問題か』（岩波ブックレット）2004年1月
- * 田中孝一監修『中学校・高等学校 PISA型「読解力」-考え方と実践-』（明治書院）2007年7月
- * 日本教育方法学会編『現代カリキュラム研究と教育方法学-新学習指導要領・PISA型学力を問う-』（図書文化）2008年10月
- * 門脇厚司『学校の社会力』（朝日新聞社）2002年7月
- * 野田俊作・萩昌子『クラスはよみがえる-学校教育に生かすアドラー心理学-』（創元社）1989年6月
- * J・ジェイコブズ共著『先生のためのアイデアブック-協同学習の基本原則とテクニック-』（ナカニシヤ出版）2005年11月

(4) 学習到達度確認テストの活用

① 学習到達度確認テストを活用すると、どんな利点がありますか。

- ・日々の授業で、どこに課題があるかを意識して授業を作ったり、個別指導に生かすことができます。
- ・レディネステストとして利用することで、学習状況に応じた単元計画・学習展開の工夫を図ることができます。
- ・どの程度まで理解しておく必要があるかを具体的に児童生徒に示すことができ、ワーク等を使って復習させるときの意欲の喚起につながります。
- ・個々の児童生徒の克服すべき点が明らかになり、つまずきに合った対応ができます。また、学校の実態も明確になり、他教科との関連の必要性もおさえることができます。
- ・児童生徒の課題から授業改善の方向が見えます。
- ・いろいろな問題に取り組むことにより、問題を深く考え解決しようとする姿が児童生徒に見られます。
- ・活用力について評価しやすくなります。
- ・全県的な状況と比較することで、より客観的に学習状況を把握することができ、客観的な評価ができます。

② 中学生が小学生の問題をしてもよいのでしょうか。

- ・たとえば、比例の学習で、小学校6年生の問題を中学校1年生にやらせてみることで、既習事項の定着状況を診断的にとらえることができます。もちろん、他の学年でも同様に下学年の内容をやらせることで、レディネスを把握することができます。
- ・また、中学校で行ったテスト結果を小学校に伝え、小・中合同で分析することで、系統性を踏まえた授業研究が可能になり、授業レベルの小・中連携が進みます。

③ テスト結果を入力する時間がありません。

- ・どのようなテストでも合計点を算出するだけでなく、個別の問題ごと、あるいは観点ごとの状況について集計・分析することで、つまずきの把握や指導の改善を図ることができます。また、全県的な状況との比較により、より客観的に学習状況を把握することができます。こうしたことから、結果入力については、学校の工夫により、採点処理を担当が行い、学級を担当していない教員等が、まとめて入力を行うといった体制を整えている学校があります。

④ テストを実施する時間が取りにくいのですが。

- ・テストの活用を始めから単元計画に入れておきましょう。どうしても時間が取れないときは、学校全体で取り組む時間（朝の時間等）を設定することも考えられます。学校全体で組織的に取り組むことが大切です。

⑤ ログアウトしたあと、すぐにログインできないのですが。

- ・画面の右下の「×」印でログアウトすると、すぐにログインできません。30分程度の時間をあけないと、再度ログインできない仕組みになっていますから、ログアウトするときには、必ず画面の左下にある「■ログアウト」をクリックして閉じてください。

⑥ 学校パスワードを忘れたのですが。

- ・学校パスワードを忘れたときは、「※パスワードを忘れた方はこちらから」をクリックしてください。学校の代表アドレスに新しいパスワードが送信されます。それと同時に今までのパスワードは無効になりますから、新しいパスワードに変更されたことを教員に周知してください。

パスワードの変更を知らない他の教員が各自でここをクリックすると、どんどん新たなパスワードに更新され、どれが正しいのか分からなくなります。情報管理の観点から、パスワードをきちんと管理していただければと思います。